

戦争の記憶と復興

— ボスニアの人とマスメディア —

Memories of War and Reconstruction
— Bosnian people and mass-media —

西 沢 信 正

Nobumasa NISHIZAWA

はじめに

ボスニア戦争が終結してまもなく10年を迎える。1995年11月にクリントン大統領の調停により、米国オハイオ州デイトンの米軍基地で、戦争当事者が協議し、険しい曲折を経て和平合意に達した。当事者とは、ボスニアを代表する Izetbegovic 大統領、クロアチアを代表して Tudjman 大統領、セルビアを代表して Milosevic 大統領（最初の二人はすでに死亡、最後の人物はハーグの国連戦犯法廷で被告席にいる）である。12月21日にパリで合意書に調印して、1992年4月以来3年9ヶ月続いた戦争が公式に終結した。

その後10年は世界主要国による50億ドル（約6千億円）を越える支援を基に、ボスニア・ヘルツェゴビナ政府は、デイトン合意に従って創設された Office of High Representative (OHR と略す、高等代表部＝主権国の統治を監督する国際機関)の助言と承認を得ながら、復興と再生への歩みを進めている。

現在、英国人の Paddy Ashdown 氏が OHR の代表を務めているが、「過去4年間で GDP が5%伸び、ボスニア通貨はバルカン諸国の中でもっとも安定している。投資や経済活動は、まだ十分ではないものの、予想

以上に活況を呈している」と、明るい観測を述べている。

確かに首都サラエボの国際空港も、そこから市内に向かう約10キロの道路沿いの町並みも年ごとに復興を印象づける。Ashdown 氏の分析がどこまで正当なのか、また、真実の姿はどうか、様々な人たちの声を聞くため、2004年8月末から9月初めにかけて現地調査を行い、考察した。

第二次世界大戦以後、ヨーロッパでもっとも残虐な戦争といわれたボスニア・ヘルツェゴビナでの約4年間の“隣人戦争”の記憶は、そう簡単に消えることはない。戦争の推進者で、人道法違反の罪で起訴された Slobodan Milosevic が、ハーグの国連戦争犯罪法廷で裁判にかけていることと、時の経過、それに日本をはじめ欧米諸国による粘り強い支援の三つの要素が重なって、戦争の記憶を「歴史の教訓」とし、EU加盟を目標に置いた新しい国づくりへの意欲が、民衆の間で高まっていることを実感した。しかし、許すことはあっても忘れることはできない--というのが、難民をはじめサラエボ、モスタルの人たちの心に残る傷である。

Ivan Lovrenovic の新著 “Bosnia – A Cultural History”

サラエボの書店に上記の本が並んでいた。1998年にボスニア語で執筆された本を、ロンドンのボスニア研究所で英語に翻訳したもので、2001年に Saqi Books から出版された。Lovrenovic はボスニアを代表する作家、歴史家で、サラエボにある出版社 Svjetlost の編集責任者をしている。いままでに数多くの小説、詩、随筆、映画の脚本を書いてきた。

いつ終わるともしれないサラエボ包囲の状況下にあった1994年、Lovrenovic はニューヨーク・タイムズの OP-ED ページに「サラエボにあった記憶が灰燼に帰す」(Ashes of Memory in Sarajevo) という評論を書いた。(ボスニア語で書かれたものの英訳) この中で、セルビア勢力によって歴史と文化がまず攻撃の標的となり、100年の歴史を持つ国立図書館と保管されていた古文書や貴重な図書、資料が消失したこと、また Oriental Institute が破壊されつくし、サラエボ郊外のカトリック Franciscan Seminary を廃墟としてしまったことをあげた。文化と過去の記憶の破壊と嘆いた。何百年に及んで営々と収集された学術、芸術の資料が、灰燼に帰したのである。なぜ過去の記憶をぬぐい去るような組織的な戦術あるいは戦略で、この戦争が進められたのか。燃えさかる国立図書館の周りには、砲火が飛び交う中でも多くの市民が詰めかけたといわれるが、その動機はなんだったのだろうか。このときの評論では触れていない。

その答えは新著の中にあった。” Bosnia – A Cultural History ” は旧石器時代から始まって1992–95年のボスニア戦争までを、図版と地図を入れながら、人間の歴史を記録したものである。1980年戦後のユーゴスラビアを統治していたチトー大統領が死去し、1989

年のベルリンの壁崩壊以後、同国を支配していた共産主義に代わって民族主義が頭をもたげてきた。宗教と政治の接近である。

ボスニアは戦前ボスニア人(イスラム教徒)41%、セルビア人(セルビア正教会教徒)33%、クロアチア人(カトリック教徒)17%と統計上は民族の分布になっていた。しかし現実には信仰を越えて結婚をしてきた歴史があって、純粋な分割は全く不可能な状況であった。Lovrenovic 自身クロアチア系ではあるが、自らをボスニア人と認識しているのである。

「もともとボスニアでは正教とカトリックとイスラム教それに少数ではあるが、スペインを異端審問で追われて定着したユダヤ教徒の信仰するユダヤ教の四つの宗教がお互い他を認め、共存してきた」と Lovrenovic はいう。^{注1}

彼がユダヤ教に触れているのは他の歴史家、評論家には見られない特質である。2002年頃からサラエボ市内で販売されているポスターのなかに、新月と星のイスラム教、太い十字架のカトリック、細長い十字架のセルビア正教、ダビデの星のユダヤ教をあしらった4枚のカードを右手でがっちりしめているのがある。左下に” With God On Our Side ” と記され、ボスニアで制作されたポスター展のための作品であった。戦後の精神的支柱として



サラエボで販売されるポスター
四つの宗教の協力と協調をうたう。

デイトン合意の結果、ボスニア・ヘルツェゴビナ共和国が連邦とセルビア共和国の二つの自治区 (entity と呼ぶ) にわかれ、サラエボを首都とすることになった。



四つの宗教の協力的共存を進めていこうという、ボスニア人の気持ちを表したものと受け止めていいのではないのか。

1995年に戦争が終結するまでの歴史を、感情を交えず記述しているが、セルビア人勢力にサラエボの家を追われ、何十年にわたって収集した貴重な文献や本を焼き払われてしまった個人体験を持つ Lovrenovic が、戦争の内側から見た現在史の転換点をどう見ているのか。

彼の一貫した考え方は、ボスニアは民族的、文化的に分割は不可能であり、民族意識を超えて文化的な共存しか将来はないという立場に立つ。戦争の転換点として、1994年3月18日をあげる。それまでクロアチア人勢力とボスニア・ヘルツェゴビナ人勢力との間で流血の戦闘を繰り返してきたところに、初めて米国が直接関わりをもち、ワシントンで両勢力の和解と合意が成立した。これが戦後、デイトン合意で、ボスニアの統治をボスニア・クロアチア連邦とセルビア共和国の二つの下部機構 (これを entity と呼ぶ) の下に置くことになったことにつながる。

これを機会にボスニア・クロアチア連合軍が、ボスニア西部クライナ地方のセルビア系勢力の追放に乗り出した。Milosevic の「遠隔操縦」でセルビアに忠誠を誓い、この地域

をセルビア本国 (ベオグラードを中心とした旧ユーゴスラビア) と一体化しようという「大セルビア主義」の温床を一週間あまりで打ち砕いた。同時に20万人以上のセルビア系住民が難民となって追われた「悲劇」の始まりでもある。

ボスニア全土がはじめにセルビア勢力、クロアチア勢力によってイスラム人を中心とするボスニア人を残虐にも追い立て、男子を殺害し、女性をレイプし、人道法違反の数々が、欧米のジャーナリズムで連日報道されていても、国連は消極的だった。国連は明石康事務次長をブトロス事務総長の特別代表とし戦争終結の総指揮者とした。国連保護軍 (UNPROFOR, 多国籍軍) を投入して戦闘勢力の引き離し、本当に守れないのに、国連指定の安全地域としてサラエボ、ビハチ、ゴラジュデ、ツズラ、ゼパ、スレブレニツァを防護するという対応だった。国連は戦争当事国から表向きは一定の距離を保ち、中立といいながら、Mirosevic に対して懐柔策をとり続けたことは否定できない。

クリントン大統領も大統領選挙戦ではセルビア勢力の残虐行為に対して、人道的犯罪は許せないと強く訴えながら、一定の距離を保つという矛盾した政策を維持した。これに対して民族の共存しかボスニアの生きる道はないとして報道し、論陣を張ってきたサラエボの新聞、Oslobodjenje 紙の Kemal Kurspahic 編集局長は、クリントン大統領に直接訴えた。しかし、熱意はなかったと、彼は著書 "As Long As Sarejevo Exists" に書いている。

ボスニア戦争はセルビア民族主義者による大セルビア主義とクロアチア民族主義による大クロアチア主義の産物であり、無防備に近いボスニア人が犠牲者となっている。この戦争では当事国それぞれの痛み分けというものではなく、中立政策をとることは正義に反す

るとの訴えである。^{注2}

ワシントン合意（Washington Agreement）以後、特にビハチとその周辺、ゼパとスレブレニツア、ゴラジュデの3地域に対するセルビア勢力の攻勢が強まり、完全に包囲された。国連軍による救援活動も妨害される状況下でのサラエボへの攻撃は一段とはげしくなった。Lovrenovic は1995年夏に危機が訪れたと記録する。^{注3}「UNPROFOR 部隊が消極的に監視する中、組織的にスレブレニツアの住民と周辺地域からの難民を、組織的、計画的に虐殺していった。クリントン大統領がやっと重い腰を上げたのは、この事実以後である。NATO 軍の爆撃、クライナ地域に対するクロアチア、ボスニア軍の共同軍事作戦で、セルビア系住民が追い立てられていったが、Milosevic は声一つたてず、静かに見守っていた」という。^{注4}

戦争は何をもたらしたのか。Lovrenovic は長期的にみてボスニアとボスニア人の文化的、道義的な背骨が徹底的に破壊され、次の世代も背負っていかなければならない重荷となったが、「その犯罪行為と責任はボスニアの道義的再建をする上で、もっとも困難な問題になるのは間違いない」と指摘する。^{注5}

クロアチア系住民の多くが住むボスニア南西部、モスタル（Mostar）地域ではクロアチア軍が何百年の歴史を刻んだイスラム文化財（宗教的建物など）を破壊し、モスタル以南のセルビア正教の Zitomislic 修道院も廃墟となった。モスタルのネレトバ川にかかるオスマントルコ時代の美しい橋の破壊は象徴的で、文化の破壊、歴史の記憶の破壊以外のなものでもない。

Lovrenovic は「ボスニア人であることはもっとも基本的な人間生活の中で違いを認め、他者に対する思いやりの気持ちを持つことである。戦争でボスニア人はボスニア人である

ことをやめ、ボスニアのモスレム人、セルビア人、そしてクロアチア人になってしまった」と嘆く。^{注6}

現在のボスニアの文化活動やメディアの状況を見ると、創造的で生き生きしたところがあり、民族主義などの狭い領域に閉じこもらず、全国土が一体化し、現代世界の多様な価値観の共有を図ることは夢ではないこと、ボスニア人もそれを望んでいると Lovrenovic は考えている。

「この様な願いは現在の文化活動の中に反映しているし、戦争のトラウマはあっても、人々の日常生活のなかに息づいてはいる。だが、人々の意思がどこまで政治の上に生かされるかは、ただ単にボスニア・ヘルツェゴビナの開発、発展だけの問題ではない」と結んでいる。^{注7} 彼が主張したいのは、ボスニアの歴史が破壊された後、「多民族共生の長い歴史」を思い起こしながら、文化の記憶を取り戻し、未来に継承していかなければならないことを、説いているにちがいない。

その意味で、Adil Zulfikarpasic（1921年—）の主張する活動は狭い民族主義の垣根を越えようという意義を持つ。2000年3月サラエボに6階建てのボスニア研究所を建設し、スイスのチューリッヒに亡命中に収集したボスニア、バルカン諸国の古文書、図書、ボスニアの画家の作品を収め、世界の研究者に開放している。かつてチトー大統領とナチスドイツに対するパルチザン活動をしたが、チトーと袂をわかってスイスに亡命し、共産主義でなく真の民主主義をボスニアにもたらそうとした人物である。国立図書館が失った「過去の記憶」を補う大きな役割を果たしているといえる。彼の著書、“The Bosniak”（1998）は Kurspahic の “As Long As Sarajevo Exists” と Lovrenovic の “Bosnia—A Cultural History” とともにボスニアの戦後の精神的復興の方向

を示す「三部作 (trilogy)」である。

モスタルの橋と人

1993年11月9日、モスタル (Mostar) を流れるネレトバ川に、弧を描いてかかる橋、Stari most (古い橋) が、クロアチア軍の砲兵隊によって破壊された。石灰岩でできているので「白い橋」とも呼ばれる。これが2004年7月23日に再建された。フランス人の橋梁技術者の熱意と国連教育科学文化機関 (ユネスコ) の力でできたもので、約16億5千万円が投入された。

モスタルは「橋の番人」という意味である。オスマントルコ帝国のスレイマン1世がコンスタンチノーブルに本拠を置いて権勢を誇っていた1557年、トルコ人の技師がモスタルにやってきて、それまでの小さな吊り橋に代え、人も牛馬も通れる石橋を架ける計画をたてた。



モスタルの「白い橋」が再建された。
橋の中央から若者が飛び込みをしていた。



モスタル大通りに残るイスラム教徒地区の破壊建物

近くの山から取り出した石灰岩の白い岩を切り、石を鉄の締め金と溶かした鉛でつないで、全長29メートルの橋を架けた。天空に美事な弧を描く橋は1566年に完成した。計画から9年の年月がかかった。橋の両端に塔が立ち、「番人」が暮らして安全を見守ってきたという。

町の東西をつなぐ交通の要衝として人も車も親しみを持って渡ったのだ。橋の両端2、3メートルのところは、牛車が滑らないように傾斜部分に、30センチ置きに「車止め」の刻み石がある。(この部分は作られたときのものである)。400年以上の歴史を刻み、世界の文化財として保存され、利用されてきたものであった。1870年代にトルコ軍が退却するときも、第一次世界大戦、第二次世界大戦中も、この橋を爆破するなどという愚かな考えは誰も抱かなかった。

モスタルの住民は川をはさんで左岸にイスラム教徒、右にクロアチア系のキリスト教徒とおおざっぱに分かれて住んでいた。1992年に戦争が始まるまでは、宗教を超えた結婚が日常的で特別に信仰を意識するような事はなかった。ところが戦争に突入すると、クロアチア系住民は、後ろで大クロアチア主義を唱える Tudjman 大統領に政治的な操作をうけ、きのうまでの隣人、友人、学友らへの理由なき憎しみをつのらせ、殺し合い、建物の破壊が始まった。無防備に近いイスラム教徒たちは、クロアチア兵士の残虐な攻撃の犠牲となっていた。

私は1999年3月にモスタルを初めて訪ねた。当時、サラエボの新聞社 Oslobodjenje の編集局次長だった Rasim Cerimagic の案内で、彼の車ででかけた。ネレトバ川に近づくると建物の破壊はすさまじいばかりで、戦争のすごさをここでも見た。白い橋は工事中で、すぐそばで土産物の金細工を作って売っていた人と会った。戦争で左手を失ったといていた。

別の橋を渡って100メートルほど行くと幅50メートルの大通りがある。戦争中はここが最前線だった。クロアチア人地区は立派な建物が建ち、向かいのイスラム教徒側の大きな建物は、破壊されたまま手がつけられていなかった。大通りをわたってクロアチア人地区の中流家庭の住宅地に入ったところ、Rasim氏は「早くここを出よう」といって、イスラム教徒地区に引き返したことを覚えている。クロアチア人に対する不信感からであった。

2004年8月末に再びモスタルを訪れた。以前より建物の再建は進んでいたものの、大通りに面した破壊建物には手がつけられていなかった。Stari mostには多くの人たちが行き交い、橋の中央のパラペットから訓練を受けた若者が次々に27メートル下のネレット川に飛び込み、喝采を受けていた。橋の上にいっぱいの人たちがいたが、「戦争」を忘れたかのように、伝統行事の復活を心から喜んでいたようだった。

ユネスコをはじめ欧米諸国は再建の条件として、クロアチア人とイスラム教徒がにらみ合いをやめ、和解の決意がなければならぬという一項を付けた。現在、和解が円滑に進んでいるという保障はない。日本も国際協力機構 (JICA) を通して市バス70台をモスタル市の再建にと贈与したが、条件は両地区を平等に運行することだった。いま、サラエボ市内と同じように、黄色の車体の市バスが市内を走っていた。

和解には時間が必要である。ハーバード大学のMichael Ignatieff教授が書いているように白い橋の再建は、1995年モスタルにやってきたフランス人の橋梁技師、Gilles Pequeuxが理想を追い求めた成果であり、理想とは過去から未来へ、憎悪から和解へ、国際社会と地元を結ぶ心の橋渡しを意味する隠喩 (metaphor) である。^{注8} 未来に向かっての

象徴的な意味を持っている。

橋のそばにある小さなテレビ局Radio Televizua Mostarを訪ねた。Rasim Cerimagicがサラエボで戦争報道の指揮を執っていた頃、モスタル支局で取材にあたっていたAlija Behramが社長兼報道局長だった。



アリア・ベヘラム局長 (モスタルTV放送局で)



ボスニアの協力提携5局

Stari mostを渡って大通りに出る前のイスラム教徒が住む地区の4階建てのビルに放送局があった。縦横10メートル足らずのスタジオがあった。ラジオとテレビ合わせて47人の社員がいて、全員が会社の株主ということだった。現在、一日3回のローカル、全国、世界のニュース報道をしているが、国内のテレビ局と衛星放送で結んで、番組交換をしているという。モスタル、サラエボ、バンヤールカ、ツツラ、ゼニツアの4放送局が連合を組み、イタリアの放送局の協力も得ている。

テレビ局連合（Mreza Plus, mreza とは network のこと）ができたのは2001年8月20日である。連合調印後、5局がこれに参加した。

戦時中、EUの支援で、アドリア海にフランスの南極観測船を改造した「言論の自由号」というラジオ船が活躍した。公平な戦争報道を目指したが、資金が続かずわずか一年で終わった。セルビア、クロアチア、イスラムそれぞれの放送局が流す偏った報道を正そうという試みだった。Alija Behram はモスタルからアマチュア無線を使って、「言論の自由号」に原稿を送った経験がある。

クロアチア系住民が、隣のクロアチア共和国の軍隊の支援を受けて、それまで隣人であったイスラム教徒に無差別攻撃をしてきた事実を知っている Alija にとって、その苦悩からどう抜け出すのか、宗教の違いを超えて共存をどう実現すればいいのか。いつも頭から去らなかったという。

ラジオ、テレビ局を開設するにあたって EU の支援を受けた。また George Soros（ハンガリー出身で米国に帰化し、ニューヨークで投資家として億万長者となり、ボスニア戦争の復興に資金を出したり、ロシアの知的復興に援助したりする、philanthropist）が主宰する Soros 財団や米国の USAID（国際援助開発局）、OSCE（ヘルシンキ会議で始まった欧州安全保障機構）、デンマーク政府の財政援助などを受けたという。

まず1995年に小さなラジオ局を開局、年末にテレビ局を開設した。放送の理念はかつて働いていた Oslobodjenje 紙の編集方針である、民族共存、宗教によるドグマを排することを踏襲し、戦後の復興と和解に貢献することをあげた。大通りを境にした「繁栄と破壊」の対照的な姿がいつなくなるのか。心の傷をいやせるのはいつか。放送によってどこまで

それが可能か。もう少し時間を待たなければならぬ。

モスタルへの鉄道

モスタルにはチトー時代にできた幅広い片側一車線の道路を使って、車で3時間弱で行けるが、今回、サラエボ中央駅から鉄道を利用することにした。一日2本、午前6時20分発と午後7時発だった。始発列車に乗った。5両編成のジーゼル車である。50人あまりの客は、ほの暗いホームで列車に乗り込む。薄汚れた客席ではあるが、国家予算の配分からやむを得ないのだろう。サンドイッチや飲み物を提供する“調理場”もついた客車が1両あった。私たちは鉄道局の運行監督と調理師と仲良しになりずっと話をつづけた。

この列車はサラエボからモスタルを過ぎクロアチア領の港町、Police（ポリチェ）まで運行し、港で石炭と石油などを積んで、サラエボ-Zenica（ゼニツア）まで人と貨物を運ぶ“産業の動脈”である。戦争で鉄道は大きな被害を受けた。欧米諸国や日本の援助で運行が再開されたが、まだ復興の課題が残っている。鉄道が敷設されたのは1866年、軌道は狭軌で76センチだったが、1966年に1.635メートルの広軌となった。戦前は時速100キロで走り、サラエボ-ポリチェまで2時間だったのが、いまは45キロに落ちているので、4時間もかかる。

職員の定年について男子が65歳か、35年勤務か、女性は60歳か、40年勤務か選択制だと話していた。海拔540メートルのサラエボから Evan 山を登り、海拔750メートルの Bradina に上がったところから、今度はつづら折りの下りになり、ネレトバ川に沿って海拔70メートルのモルタルに入ってゆく。「いままでも列車事故は一度もない。モスタルまで179キロの行程に104のトンネルがある」と二



鉄道高低図



人は語っていた。山岳鉄道のために、貨物列車の場合は、機関車が前に2両、後ろに1両でモスタルからZenicaに向かうという。

モスタルに入る前にネレット川には、川をせき止めたダム湖が4箇所あった。それは発電のためだが、この電力をクロアチアなどに販売して、国家収入の財源としているというRasimの話に経済施策の貴重な情報を聞いた思いであった。

Zenicaはボスニア中部の工業都市で、人口12万人。2003年にバスで一時停車してみた

が、従業員のアパート群が立ち並んでいたのが印象に残っている。旧ユーゴスラビア時代に製鉄工業の中心として栄えたが、戦争で生産はゼロとなった。いま英国の企業を買収して生産を始め、現在2500人を雇用している。2005年にはさらに4000人を新規採用する動きがあるという。生産の増大に伴って、原料特に石炭と石油をクロアチアの港から運ばなければならないが、そこに大きな問題が横たわっていた。

モスタルを過ぎてクロアチアの国境で、面

倒な検問を受けた後、Police 港に向かうことになっている。戦後、クロアチア側とボスニア側双方から3人の委員で構成する委員会が、列車の運行に関して協議するという面倒な手続きを経なければならない。国際機関から委員長をというボスニア側の要請に、クロアチアは断固として拒否し、円滑な運営を妨げているのが実情である。戦争のしこりはここに残っている。

ボスニア国内でも、鉄道が北へセルビア共和国区域に入るときには、機関車を取り替えて、乗務員も交代という条件がある。一つの国として、またかつてのユーゴスラビア連邦下でのような、円滑な運営は行われていない。

鉄道は産業再建と観光にとって欠かせない。戦時中の被害と復興の状況を詳しく聞くため鉄道省を訪ねた。Hajrudin Topic 連邦鉄道局長（基盤整備担当、連邦とはクロアチア・ボスニア地区のことで、セルビア地区は入らない）の説明は次のようだった。

「戦争による被害は10億ドルで、17の鉄橋が破壊され、信号はすべて機能不全に陥った。2年かけて取りあえず修復できたが、国内1037キロの鉄道による全輸送量は、戦前の25%しかない。戦前2000万トンを送ったが、現在800万トンだ。日本の JICA にも整備協力を要請しているが難しい。4500万ドルが必要である。今後列車のスピードを平均時速120キロに上げるため新しい客車、機関車を調達したい。鉄道網を整備していきたいが、戦争のしこりと、予算の配分、先進国からの支援なしでは、なかなか目標達成には時間がかかる。」

ボスニアは中部から南部にかけて1000メートルから2000メートルの山岳地帯が続いている。バンヤ・ルカを中心とした北部はほぼ平野部だが、道路の整備と鉄道の復興と近代化が緊急の課題である。その維持管理にも多大

な費用を必要としている。独立国としての産業政策もままならない状況で、戦後10年は復興支援国が力を入れたが、いま、支援は急速に減少しているのが実情である。

難民と亡命者の願い

1. サラエボのオールド・タウンと呼ばれトルコ支配時代の名残を濃く残すバシュチャルシア地区で時計の修理と販売をしている Alihodzic Enver は、1997年夏、私が初めてサラエボを訪ねたときからの友人である。毎年、サラエボに行くと必ず彼の店を訪ねる。朝10時から午後1時まで店を開いているが、ひっきりなしに客がくる。イスラム教徒、キリスト教徒、正教徒と様々な人たちがやってくる。戦前、彼がスキーの指導員をしていて多くの人たちと交わっていたこともあるが、「宗教は個人のこころの問題で、それによって差別するのは許せない。人間を見て公平に接するのが私の信条」という信念が、人を引きつけるのであろう。

2004年夏、いつものように小さな彼の店で、小さいすに腰をかけて彼と話をしていたところ、小柄で口ひげをつけた紳士が美しい英語で「どこの国からきたのか？」と聞いてきた。彼は Murib Glodo といい、69歳、イスラム教徒で、サラエボ名家の子孫という。サラエボ大学で文化人類学を専攻し博士号をとったことがわかった。戦時中の1994年、部隊長だったが上官の話を聞いて絶望し、国を捨てた。娘がカナダのウィニペグにいたので、そこに定住し現在 Canadian Immigration Consultant として移民の相談に乗っているという。戦前、サラエボの文部省で働いていたが、結局決められたことしかやれないので、退職したという。

「文化人類学というのは哲学で、人間とは

何かを追求する学問だ。憎しみをどう乗り越えるか、人間は同じ過ちをなせくり返すのか、先住民族の土地を奪ってはいけない、などということ、移民問題に関しての講演で話している。assimilation でなくて cooperation が大切だと考える。」と、語っていた。毎年夏にサラエボに戻り、残された財産の管理や、親戚の世話をしているといっていた。



三代目の時計修理業
エンペールさん。



オランダのスボビッチさん(左)
とスウェーデンのエクレムさん。

2. その後、やせた背の高い背広姿の紳士が入ってきて「コンニチハ！」と私に声をかけてきた。Ekrem Becirovic といい71歳のイスラム教徒だった。サラエボ大学で言語学を学び、スウェーデンの大学に1967年から71年まで留学し、2年間ドイツにも留学、戦争前はスウェーデン語とドイツ語、それに英語の翻訳で生計を立てていた。コンピュータ翻訳機械（英語とボスニア語）の研究もしていたという。サラエボに帰るのは、兄弟や親戚の人たちに、日本円で3万くらいを渡して生活の足しにしてもらおうということだった。93年1月、難民としてスウェーデンに移った。「いまはLund市に住んで、十分な生活が保障されていて、本当に幸せだ。サラエボの町に帰るのはある意味で楽しく、また身内の生活支援もしなければならぬので重荷だ。町でスカーフをつけた女性が多くなったが、昔はそんなことはなかったはずだ。それだけイスラム色を濃くしてきたのだろうか。この国の寛容の精神と自由を尊ぶ気風を大切にしたいものだ」

と、途切れることなく語り続けた。

3. Zubovic Sveto (69) は Ekrem とよく町のカフェテラスで一緒にいる。町を歩いていて声をかけられ、難民生活の一端を語ってくれた。彼は元商社マンで92年4月、戦争が始まったときは、スロベニアの首都リュブリアナの駐在員だった。やっとの思いでサラエボに帰ったものの、セルビア勢力による包囲網と集中砲火で地獄の状態だった。家族とともに93年2月、オランダに難民として移住した。立派な英語を話す。父親がカトリック（クロアチア）母親がイスラム教徒で、自分はセルビア正教徒だといっていた。

「ボスニアでは家も預金も現実の生活もすべて失った。しかし生き延びた。ボスニアにすべてをかけてきたのだが、報いはなにもない。二人の息子はいまオランダで働いていて、生活に全く不安はない。オランダは本当に素晴らしい国だ。人権の尊重とか難民受け入れについていえば、英国、ドイツはよくないし、フランス、スペイン、イタリア、トルコは全くだめといっている。いまのボスニアはヨーロッパ諸国に30年遅れている。どうしてこの差を縮めるのか、大きな課題だ」と語っていた。

4. サラエボの常宿 Pansion Cobanija は収容人員14人のホテルである。私の部屋の向かい側の部屋にいた若い西欧人が、8月30日夕方、ドアを開けたままコンピュータをたたいていた。私は本能的に「新聞記者ですか」と聞いた。「スイスの Le Temps 紙の記者で、スイスに暮らしていたスレブレニツァ難民200人の帰国に随行して取材してきた。2ページの特集原稿をいま打ち込んでいる最中だ」という答えだった。なんとしても話を聞きたいというと、翌朝に会う約束をしてくれた。



スイスの Le Temps 紙記者
Luis Lema さん
(バンション・チョバニア前)

彼は Luis Lema (38) といい、同紙の外報部員でエルサレム特派員を3年勤めた後帰国したばかりだったが、難民帰国取材という大変重要な仕事を受け持った。戦争中、スレブレニツアは国連安保理事会が指定した5つの「安全地域」のひとつで、オランダ軍の国連保護部隊が駐留していた。セルビア人勢力とセルビア軍によって追われたイスラム教徒難民は何万人と「安全地帯」に逃げ込んできた。セルビア勢力はオランダ軍兵士の制止を無視して、安全地帯に入り込み、男性8千人を家族と引き離して連れだし林の中で大量虐殺をした。

オランダ軍は再三、国連代表にセルビア勢力に対して、NATO空軍による爆撃を要請したが、聞き入れられなかった。なぜなのか、永遠の謎として残るであろう。明石康元国連代表が「真実」を語る時がきている。スレブレニツアの虐殺は国連にとって最大の「汚点」である。国連事務局は1999年11月15日付けで、「スレブレニツア陥落に関する事務総長報告」(Report of the Secretary-General pursuant to General Assembly resolution 53/35 The fall of Srebrenica) を国連総会に提出し、国連軍の失敗を明らかにした。

Luis Lemaによるとスイスには難民問題を担当する組織 OIM (Organization International Migration) があって、スレブレニツア難民もここの組織を通して、徐々に帰国することになった。スイス政府の考え方は、難民をいつまでも自国で支援するのではなく、早く帰国させる。その場合

帰国しても自立できるように一定の資金を贈与する。同時に、帰る村にも同額の資金を提供するという。その方が、費用が少なく、効果があるという判断である。

今回の場合、一家族4000ドル、村にも同額の資金を出した。それは、帰国する難民が村に残って困難に耐えた人たちよりも“豊か”であることが原因で、偏見がうまれるのを避けるためだそうだ。

Luis Lemaによると、スレブレニツアの村は完全に破壊されて、残っていたのは病院一つと学校一校だけという。そこには難民がいっぱい。食品加工工場が一つ、スウェーデン政府の支援で開業したばかりで、従業員は30人くらい。ところがセルビア人が26人でイスラム教徒が4人という不公平がまかり通っている。戦前の統計ではこの町は7割以上がイスラム教徒の村だった。戦争でセルビア軍に包囲され、イスラム教徒が虐殺され人口が減少しているとはいえ、セルビア人を多く採用することに強い不満が聞かれたといっていた。「スレブレニツアの選挙で難民のイスラム人が村長に選ばれたが、サラエボに住んでいる。副市長はセルビア人でバンヤ・ルカに住み、ともに一ヶ月に一度しか顔を合わせない。これが腐敗墮落の原因になる」とLemaは心配していた。

5. Luis Lemaは遅い朝食を済ませた後、しばらく私と話をした後、スイスに帰国するため同行のカメラマンとともにホテルをあとにした。ところがである。ホテルの小さな受付に、毎日夜勤(午後5時から午前8時まで)をしている Tahic Muhamed (30) が、スレブレニツアの虐殺を逃れてきた一人と分った。スイス人の記者のことを話したところ、「私も難民だ!」といったのでわかった。英語がよくできないので、

次の機会にゆっくり話を聞くことにした。二人の兄はセルビア人の虐殺にあっている。月給2万5千円くらい（サラエボで普通の人の平均的収入）で、母親と妹と一緒に暮らしているという。いまもなお「悪夢に苦しんでいる」と言っていた。



パンション・チョバニアの夜勤をする、スレブレニツァ虐殺を免れたタヒチ・ムハメドさん

おわりに

2004年9月1日、サラエボの町のキオスクに並ぶ5つの新聞の内、セルビア地区のバンヤ・ルカで発行されている Nezavisne novine が、一面トップで元ユーゴスラビア大統領、Milosevic のハーグ戦争犯罪法廷での弁論を、報じていた。他の新聞も扱いは違っても、この裁判の行方に重大な関心を寄せていた。

8月31日ハーグの法廷は、Milosevic の弁論開始を始めた。過去24ヶ月に渡って続けられた検察側の大量虐殺（genocide）の責任追及が終わって、「弁護側」の反論である。Milosevic は弁護人を拒否し、いままで一人で検察の尋問に反駁してきた。その反論が筋違いで、勝手な歴史解釈や都合のいいように曲解した議論で、たびたび裁判長から「本論に関係ないからやめよ」と注意されてきた。

この日の自己弁護は、ニューヨークタイムズ紙、ガーディアン紙などによれば「弁護というよりも4時間に渡る独りよがりの歴史の講義に終始した」という。^{注9} ユーゴスラビアを破壊し、90年代の戦争をもたらしたのは西側諸国であるといい、主要な犯罪国家は、ドイツであり、バチカンであり、米国であると決めつけていた。そして「この法廷は戦争の道具で、正義のためにない」と挑発した。

彼の立場はセルビア人とセルビア文化が、カトリック、イスラム原理主義によって破壊されてきたというもので、オスマントルコ時代の屈辱から、ナチスドイツによる弾圧を例に挙げて、「恨みの深さ」を“政治的に利用してみせる。そこには反省も和解の兆しもない。

国連戦争犯罪法廷は後4、5年でその任務を終える予定である。人道に反する罪（crime against humanity）がどう裁かれ、20万人の死者と300万人の難民、数え切れない負傷者たちと、国土の荒廃の責任をどうとるのか。国家元首が罪に問われている犯罪である。いままで起訴された被告人の多くは、「上官の命令で」とか「命令に従わなければ殺されたので」といった自己弁護が続ける。それでも多くの被告人が、行った行為の反省を強くしていることは希望である。

スロベニア、クロアチア、ボスニアそしてコソボと、四つの戦争を戦った旧ユーゴスラビアはいずれも完全に破れた。国連の経済制裁をはじめ、孤立を続けた。（中国、ロシアが支援したが）。2003年2月4日、国名も「セルビア・モンテネグロ」と変更された。EU加盟を目指して法整備を進めているが、失業率25%、月給の平均は\$246（およそ2万6千円）である。スロベニアはEUに正式に加盟した。クロアチアは加盟申請をしている。ボスニア、セルビアでも近いうちに加盟申請の動きが出るだろう。問題は戦争の傷を癒す努力である。

デイトン合意で、ボスニア・ヘルツェゴビナ共和国は二つの自治区（entities、セルビア共和国とクロアチア・ボスニア連邦）から成る一つの主権国家とすることになったが、復興の上から見ると「のどに刺さった骨」である。真の意味で、二つが一つにならなければ、EU加盟はおぼつかない。鉄道運行にも見ら

れるように、それぞれの entity にはいるときに機関車や、乗員を入れ替えるようなことは即刻廃止すべきだが、時間がかかる。またボスニアからクロアチア領に入るときにも、手続きが複雑で、簡素化が叫ばれているがなかなかすすまない。

市内の立派な書店「Buy Books」の店主 Damir Uzunovic は、「2004年に戦後初めてボスニアの旅行案内が英国の出版社からできましたよ」といって「Bosnia & Herzegovina, The Brandt Travel Guide」を見せたので、購入した。著者は英国人の Tim Clancy。1992年から偶然ボスニアの西部で難民支援をしたのがきっかけで、ボスニアに住み NGO 活動をしている。豊かな情報を駆使して書き上げた便利な旅行案内である。確かな歴史をふまえ、戦争中の事実も織り交ぜて、ヨーロッパの新しい観光地としてのボスニア・ヘルツェゴビナが描かれている。OHR の Paddy Ashdown が序文を添えて、世界の人たちに呼びかけている。Damir によるとすでに2000部を売り、増刷中という。ボスニアに対するヨーロッパの関心が高まることから、ボスニア人自身の復興への意欲をかき立てることに結びつくであろう。

先に挙げた英国の製鉄工場が Zenica にある工場を買収して雇用を増大させ、鉄鋼生産をあげる道ができたのも明るい材料である。日本も含め世界の企業がここに投資するかどうか、今後を占う鍵である。日本の企業進出として、新潟県白根市に本社を置く藤村式黒板製作所があげられる。「戦争で学校が破壊され黒板の需要が大きいに違いない。金儲けだけではなく、次の世代の子どもたちのためにと決心した」と、藤村平一郎社長は2003年夏、サラエボで語っていた。

2004年11月12日付けの英字新聞、Daily Yomiuri に「スレブレニツァの虐殺に、ボスニ

アのセルビア当局、初めて公式謝罪」(Bosnian Serbs make 1st formal Srebrenica apology) というロイター電が小さく掲載されていた。ボスニアのセルビア自治地区 (entity と呼ぶ) の政府は調査委員会を設けてスレブレニツァ虐殺の報告書をまとめた結果で、8000人に及ぶ犠牲者を出した虐殺行為はセルビア側にあることを認めた。真実を明らかにして、謝罪することが和解の道である。これは大きな前進である。

Milosevic の他に、戦時中セルビア共和国“大統領”だった Radovan Karadzic、軍司令官だった Ratko Mladic を戦争犯罪法廷に連れ出さなければ、正義は確立されない。二人はいまも人道に反する罪で起訴され、逃亡中である。

宗教に沿ってナショナリズムが形成され、かつての共産主義に代わっていまマスメディアにも影響を及ぼしているが、セルビア人の新聞 Nezavisne novine の「民族共存以外にボスニアの生きる道はない」という編集倫理が、力強い希望の証であり、モスタルの放送局が他の地域の放送局と連携して、狭いナショナリズムからの脱却を図りつつあることも注目すべきであろう。

時間の経過で過去の記憶が薄められることはない。しかし、現実的な毎日の生活、政治的、社会的、経済的、文化的な生活を過ごす中で、「戦後の新しい意味と建設」への意欲をより高めることはできるし、サラエボ、モスタル、バンヤ・ルカをはじめ、町や村でも、ゆっくりではあるが、和解せざるを得ない現実と直面しながら、あすを模索しているのである。

サラエボの真ん中を流れるミリアツカ川の流れを見ながら「方丈記」の最初のことを思い出す。嘆かず、あきらめず、ただ現実を見つめて、一步一步進むしかない。国際機関

や世界主要国の支援への意欲が、励みになると誰もがいう。オランダ政府はミリアツカ川左岸の陸軍司令部前の広場に、軍楽隊の野外演奏場を作っていた。昔を取り戻しつつ、(文化の記憶)、新たなヨーロッパ文化への融合(EU加盟)に向けてのファンファーレがなることを、オランダ政府が考えているに違いない。戦後10年の新たなスタートである。

ここで思い出したいのが一冊の本の皮肉な題である。「意志の欠如の勝利 — 国際外交とユーゴスラビア戦争」(Triumph of the lack of will—International Diplomacy and the Yugoslav War)。いま国連戦争犯罪法廷の検察顧問を務める James Gow の著書(1997)である。「弱腰外交の生んだ最悪の悲劇」と読み直すべきで、今後の国際政治、外交の指針をみる。

同時に“Ethnopolitical Warfare---Causes, Consequences, and Possible Solutions”(American Psychological Association, 2001)の編著者 Martin E.P. Seligman が、序論で問いかけていることばも、肝に銘じたい。How far along are we in the quest for an explanation of ethnic conflicts and, more specifically, how well do we understand why such conflicts sometimes escalate to become genocidal, while at other times they moderate and move toward resolution?

1995年 Dayton 合意で、ボスニア・ヘルツェゴビナに NATO 軍 6 万人の兵士が駐留して治安の維持と紛争再発防止の警備、いわゆる平和維持活動にあってきた。ところが 2004 年 11 月 4 日、EU (ヨーロッパ連合) 軍 7 千人の兵士が、その任務を引き継いだ。これほどの大がかりな軍事活動は EU にとって初めてのことである。

NATO 軍は最終段階では米軍兵士 900 人を

含め、仏軍など 7 千人であったが、ボスニアのセルビア人、クロアチア人、イスラム教徒の間での紛争再発の可能性はほとんどないと判断によるものであった。ただ、ハーグの国連戦争犯罪裁判所に起訴されながら逃亡している戦争犯罪容疑者の逮捕のために、米軍兵士 250 人が残留している。

EU 軍の主要な任務は組織犯罪の壊滅であり、民族憎悪による紛争再発の予防である。OHR の Paddy Ashdown 代表 (英国政治家) が指摘するように、組織犯罪は政治、経済の発展を著しく阻害する要因であることは間違いなく、汚職と麻薬と性犯罪それにテロの温床となる。ジャーナリズムの取り組むべき重要課題である。

ニューヨーク・タイムズのコラムニスト、Thomas L. Friedman は 2002 年に、ボスニアの安定のためには、それぞれの宗教 (民族) に 3 分割するのがいいのではないかと書いて、Ashdown 代表を始め多くのボスニア関係者から、厳しい批判をあげた。Dayton 合意は確かに不安定な内容を含んでいる。ボスニア・ヘルツェゴビナを、セルビア自治区、モスレム・クロアチア自治区に分割して、一国の中に二つの“国”を作る暫定的な政治処理をした。それを統一国家にしようとの一大事業を OHR が進めている。

戦後、フランスの Lyon 大学ジャーナリズム学部の支援で組織された新聞記者、テレビ記者養成機関 Media Plan 研究所は斬新な事業に取り組んでいる。そのひとつとしてバルカン諸国から研修にきていた若い記者に、それぞれの国での政治、社会のニュース報道のゆがみを監視する課題を与え、民主化の動きを活性化させるといふ。記者たちの意識革命を高めているのである。

すでにセルビア人自治区 (主としてキリスト教東方教会教徒が多数を占める) の首都、

バンヤ・ルカの新聞 *Nezavisne novine* の社主兼編集局長, Zeljko Copanja は着々と全国紙の地位を築き, 民族憎悪の偏見を超えて, 新しい国づくりに向けてのジャーナリズム活動を推進している。イスラム色を強めようとするイランやアラブの国の動きに, 戦争の記憶を乗り越えて, 民族共存, 宗教対立の除去にジャーナリズムがどのように立ち向かうのか。ボスニア・ヘルツェゴビナがEUに加盟できるかどうかは, ここにかかっているといっても言い過ぎではない。

注

1. Ivan Lovrenovic, “Bosnia — A Cultural History”, Saqi Books, 2001, p.209
2. Kemal Kurspahic, “As Long As Salajevo Exist”, The Pamphleteer’s Press, 1997, pp.182-8
3. Ivan Lovrenovic, “Bosnia — A Cultural History”, pp. 205-206
4. *ibid.* p. 206
5. *ibid.* p. 208
6. *ibid.* p. 209
7. *ibid.* p. 213
8. The New York Times Magazine Oct. 27, 2002
9. The International Herald Tribune, Financial Times and Guardian, Sept. 1, 2004,